

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	小宰相の局を詠ず : 文苑
Author(s)	あさころも
Citation	龍南會雜誌, 5 1 : 4 6 - 4 7
Issue date	1896-12-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4661
Right	

至りて則ち極まる。

(未完)

前號堀巢鶴の正誤

廿五頁九行良賢は良賢、二十九頁十三行制を問ふは町制を問の、同頁十七

行猜意は情意の誤

文苑

小宰相の局を詠ぜ

硯友會員 あさころも

茅渚の海浪もまづかに。月影はくまなくわたり。野も山もまぢかく見えつ。一の谷、まろさへ失せて。しかすがに、焼野の原の夕烟、さえてあとなし。戸ふく、風なまぐさし。いかならむ、修羅のちまたか。」

漕ぎ出づる、舟のぬしはそも。誰ならむ、夜深かるに。走りしは、平家の公達、残りしは、源氏のたけらを。さるにても、やさしき人や。いかならむ、人にませばか。」

ぬらしつる、袖いかなれば。かくばかり、棹のしづくか。くだきぬる、心はいかに。かくばかり、打よする浪か。立迷ふ、磯間の、けむり。それならで、局の身こそ。憐なれ、末の松山。浪こえて、歸へらぬ旅に。出たまふ、まが夫こそは。」

衣手に、わたる雪の。つくぐと、思へばかなし。これやこの、何と忍ばむ。草衣、きてし心の。うたてさよ、うつせみの世は。此世こそ、定なけれど。人もいひ、我れもいひけり。」

さりととも、思へばこそあれ。ひたすたらに、命ながらへ。逢はん事、たのみにしては、か

くばかり、あと追ふものをなでうそも、果敢なくうせき難波江の、よしや里くれ。山く
れて筑紫のはてに。さすらふも、同じ旅にし。あるなれば、猶末ありと。思ひしを恨なり
けり。花の吉野、月の更料。語らひし、其睡言は。何せんに。命なりけり。」

よしさらば、うき身をすて。此海の、もくづとならむ。なづかえや、うつくし夫は。陸に
ふし、われは海路に。わかれなむ。なみを隔つる。愁はあれ、心はいかで。隔つべき、いざや
急がむ。」

山の端に、傾く月の。影すみの江、松もみどりに。生田の森、名さへ恨めえ。こゝ舟は、すゝ
め松原。浦のべにみぬめたく火は。衛士かはた、和田の湊に。舟はでむ、たつきもしらて。
えが身はつる、泊なりけり。」

むら雲に、月はかくりぬ。慰めし、めのともいねぬ。汐風の、音のみはげし。たちまちに、時
ならぬひいき。いとすこく、散るや白玉。なみの底へと、沈み行きけり。」

草の露

硯友會員 蝶

二

きぬ た (課題)

かたやまざとの秋の夜半、

月に妻こふ鹿の聲、

簀ゆ落つる水の音、

さくたにいとわびしきに、

心をくたくえづのめの、

衣うつこゑひしくなり。

夜さむのかせの身にしてみて、

ゆめもむすばぬまくらべに、